

評論文教材の表現と主題

－「比較・対照」のレトリックに着目した文章読解の方法－

Expressions and Themes in Critical Essays as Japanese Language Teaching Resources:
A Reading Comprehension Method focusing on “Comparing and Contrasting Rhetoric”

坂 田 達 紀

Tatsuki SAKATA

四天王寺大学紀要
大 学 院 第16号
人文社会学部・教育学部・経営学部 第55号 2013年3月
短 期 大 学 部 第63号
(抜刷)

評論文教材の表現と主題 —「比較・対照」のレトリックに着目した文章読解の方法—

坂 田 達 紀

要旨

学習者の文章読解力を育成することは、国語科教育のもっとも基本的かつ重要な目標・課題の一つである。2009年3月に改訂・告示された新しい高等学校学習指導要領でも、このことは明確に述べられているが、2000年に本調査が始まった「OECD生徒の学習到達度調査(PISA)」における調査分野の一つが「読解力」であることもあり、文章読解力を向上させることの重要性は、ますます高まるものと考えられる。本稿では、このような事情に鑑み、国語教材としての評論文読解の有効かつ実践的な方法として、「比較・対照」のレトリックに着目した読み方を考察・提起した。この読解方法は、言い換えれば、その評論文が「どのように」書かれているか(＝表現)に着目して、これを手掛かりに、「何が」書かれているか(＝主題)を読み取る方法である。

まず、「比較・対照」のレトリックがどのようなものかを簡単に述べたうえで、ついで、長らく高等学校の国語教科書の多くに収載されてきた小林秀雄の「無常といふ事」を取り上げ、この文章の「主題」(テーマ)が、「比較・対照」のレトリックに着目することで、如何にして把握できるのかを具体的に示した。(なお、「無常といふ事」における「比較・対照」のレトリックは、すでに拙稿(1998)において析出されており、本稿では、この分析結果を踏まえた。)最後に、高等学校の国語教科書に収載されている、小林秀雄以外の評論文、すなわち、山崎正和の「水の東西」と中村雄二郎の『『おもしろい』と『分かる』』とを取り上げ、それぞれ全文を引いて、どのような「比較・対照」のレトリックが用いられているかを分析するとともに、このレトリックに着目することで、どのように「主題」(テーマ)が把握できるのかを詳細に述べた。

本稿で取り上げた評論文教材は三作品に過ぎないが、それでも、この読解方法の有効性、すなわち、この方法を用いれば、「主題」(テーマ)を精確かつ比較的容易に捉え得る、ということは、十分に実証的に示せたものと考えられる。

キーワード：評論文教材、読解力の向上、「比較・対照」のレトリック、「主題」の把握、読解方法

1

国語科教育において、学習者の読解力の向上を図ることは、その最重要の目標・課題の一つである。2009年3月に改訂・告示された新しい高等学校学習指導要領でも、国語科の目標の前に「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高める」¹⁾ことを掲げているが、その解説には次のようにある。

前段の「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高める」は、言語の教育としての立場に立つ国語科の目標の柱として重視してきたものである。この中の「国語を適切に表現する能力と的確に理解する能力とを育成することは国語科の最も基本的な目標であり、これらの能力の育成を基盤として、伝え合う力を高めることを位置付けている²⁾。

つまり、「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成」することこそが国語科教育の基本・基盤である、ということだが、読解力、とりわけ文章読解力は、この中の「国語を的確に理解する能力」に包摂されよう。このことをまず確認しておきたい。そして、「的確に理解する」については、また次のように解説されている。

「的確に理解」するとは、表現の仕方、表現された内容や事柄を、目的や場に応じて間違いなく理解するということである³⁾。

ここに言われている「表現の仕方」とは、分りやすく言えば、「どのように表現されているか」ということであり、また、「表現された内容や事柄」とは、「何が表現されているか」ということであろう。文章は、言うまでもなく書き言葉による表現であるから、したがって、文章読解力とは、端的には、「何が」「どのように」書かれているかを読み取る力と考えられる。国語科教育においては、先の学習指導要領およびその解説の文言から分るように、この力を育てることが、何よりも重要とされているのである。

この「何が」と「どのように」のうち、「何が」は、その文章の書き手の言いたいこと（意見・考え・主張）すなわち「主題」（テーマ）であり、特に論説文や評論文などのいわゆる論理的文章の場合、これを一義的に把握することが求められる⁴⁾。一方、「どのように」の方は、多くの要素が絡んでおり、それほど単純には言えない。一般的には、「構成」と「叙述」であろうが、「文体」や「修辞」を挙げることも可能である、というように、観点しだいで様々な分析できるものである。しかし、「どのように」は、「何が」に比して複雑ではあるものの、たとえば、物語文や小説文などのいわゆる文学的文章の場合、その作品の芸術的価値を決める、きわめて重要な要素である。もちろん、論理的文章においても重要であることに変わりはなく、こちらでは、文章の説得力の有無に関わることが多い。つまり、同じ「何が」すなわち「主題」（テーマ）であっても、「どのように」書かれているかによって、読み手にとっては、納得できるか否かということや、あるいは、納得の度合い・深浅が異なる、ということである。論理的文章を教材として扱う際には、ともすると「何が」すなわち「主題」（テーマ）の把握ばかりに目が向きがちであるが、「どのように」書かれているかを掴むこともまた、これに劣らず重要なことなのである。そして、「どのように」書かれているかを掴むことの重要性は、新しい高等学校学習指導要領でも繰り返し述べられている。たとえば、現代文Bの指導事項「オ 語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。」⁵⁾ の中の「文体や修辞などの表現上の特色をとらえ」ることなどは、正にこのことを述べたものと言えよう。

では、「何が」書かれているかを読み取るだけでなく、「何が」「どのように」書かれているかを読み取る力は、如何にして育てることができるのだろうか。

筆者は、かつて拙稿(1995)において、「表現内容に説得力を持たせるための、より良い、効果的な表現方法」を広い意味でのレトリックと捉え、読解教育や作文教育の基礎となる、文章表現の基本的なレトリックにはどのようなものがあるのかを考察した。その際、分析の範囲を評論文に限定したが、結果として、「繰り返し」、「たとえ」(「例え」と「譬え・喩え」)、「比較・対照」という三つのレトリックが析出された。本稿では、これらのうち、「比較・対照」のレトリックに着目した評論文読解の方法を考察・提起したい。これは、言い換えれば、評論文において、「比較・対照」のレトリックの観点から「どのように」書かれているかを読み取ることが、「何が」書かれているかを読み取るうえで、如何に有効であるかを示すための試みである。

2

文章が「どのように」書かれているかを読み取ることの重要性は、1に述べたとおりである。しかし、「どのように」は「何が」と同等に重要である、とは言うものの、論理的文章の範疇にある評論文の場合、その文章が読めたかどうかということは、第一義的には、「何が」すなわち「主題」(テーマ)が読み取れたかどうか、ということであろう。「何が」書かれているかを読み取ることができなければ、やはり、その評論文を読めたことにはならないのではないか。繰り返しになるが、評論文の読解では、「主題」(テーマ)の把握が何よりも求められるのである。そこで、「主題」(テーマ)という術語について、その概念をまず確認しておきたい。

土部(1993)は、『要約』に関連する術語の内実は、関連領域の内外において、複雑・微妙に入り組んでいるが、言語事実としての実質に即して、次のような三段階に大別することができるようである。」として、「大意」「要旨」「主題」を次のように整理している(3頁)。

- (1)「大意」(アウトライン) —— 「原文章の構成(章立て)・叙述(用語)に即した要約」で、「ブレーシー」(要約)、それより短い「ダイジェスト」(概要)も、原文章に忠実、という基本的性質は共通している。「アウトライン」は、「見取り図」でもあるが、「大要」「あらまし」の通称でもある。
- (2)「要旨」(サマリー) —— 「原文章の主要な部分を要約者が自分の言葉(用語・構文)でまとめなおした要約」で、「サマリー」(摘要)も、「原文章の構成・叙述に即する」必要がなく、「自分の言葉でまとめなおす」という基本的性質は共通している。自然科学領域での「アブストラクト」(展望)は、「原文章の主要な部分」の抽出という点では「要旨」に近く、新情報を多量に含みこむという点では「大意」に近いようである。
- (3)「主題」(テーマ) —— 「要旨」の中心で、「どのような『中心のものごと』(話題)が、どのような『とらえかた』(趣意)でとらえられているかを、簡潔・端的に収束した要約」である。典型的な主題文(テーマ・センテンス)は、「ナニハ(話題)、ナニダ(趣意)

意)。」という文型で収束される。

この整理のしかたは、きわめて簡潔で分りやすいものであり、三者の相違が明確に示されているので、本稿においてもこの概念規定を踏まえたい。「主題」(テーマ)を図式的に表せば、「主題」(テーマ) = 「話題」×「趣意」となるが、いずれにせよ、「主題」(テーマ)とは、そのような「趣意」の込められた「話題」(そのように「とらえ」られた「中心のものごと」の表現)のことである⁶⁾。

いま、煩雑さを避けるために、ある評論文の「中心のものごと」(話題)を「X」、それに対する「とらえかた」(趣意)を「A」で表せば、その評論文の「主題」(テーマ)は、「Xハ、Aダ。」という文型の「主題文」(テーマ・センテンス)で捉えられることになる。なお、「とらえかた」(趣意)は、「見かた」「考えかた」「感じかた」「願いかた」などと様々である⁷⁾から、「Xハ、Aダ。」という主題文(テーマ・センテンス)は、その「とらえかた」(趣意)に応じて、存在文(ガアル文)、解釈文(ナニダ文)、評価文(ドウダ文)、当為文(ベキダ文)などが用いられることになるが、基本的には、真偽判断文と考えられる⁸⁾。この「Xハ、Aダ。」は、要するに、その評論文の書き手の最も言いたいこと(意見・考え・主張)であり、書き手は、これを強調するために、あるいは、分りやすくするために、様々な工夫を凝らす。たとえば、「Xハ、Aダ。」を(多少文言を言い換えながら)二度、三度と繰り返したり(「繰り返し」のレトリック)、その具体例を挙げたり(「例え」のレトリック)、他のものごとになぞらえたり(「譬え・喩え」のレトリック)といった工夫である。これらは、評論文に頻繁に見られるが、もう一つ、屢々見られる工夫が「比較・対照」のレトリックである。これは、「A」と対極的な「B」を引き合いに出して、「Xハ、Bデハナクテ、Aダ。」という文型に「主題文」(テーマ・センテンス)を収束できるものであるか、または、「X」と対極的な「Y」をも引き合いに出して、「Yハ、Bダガ、Xハ、Aダ。」という文型にそれを収束できるものである。もちろん、「主題文」(テーマ・センテンス)だけではなく、ある「ものごと」(x)に対するある「とらえかた」(a)を述べる際、「xハ、aダ。」と述べるのではなく、「a」と対極的な「b」を引き合いに出して、「xハ、bデハナクテ、aダ。」と述べたり、「x」と対極的な「y」をも引き合いに出して、「yハ、bダガ、xハ、aダ。」と述べたりするのも、「比較・対照」のレトリックである。たとえば、文学史上、日本の近代評論を創始・確立したとされる小林秀雄は、随想的評論「当麻」において、次のように述べている。

美しい「花」がある、「花」の美しさといふ様なものはない⁹⁾。

これは、小林の根本的な思想を端的に言い表した、彼の最も有名な表現の一つであるが、ここでは、「美しい『花』」すなわち「美しい具体的なもの」と、『花』の美しさすなわち「抽象的な美」とが「比較・対照」され、前者は存在するが、後者は存在しない、ということが述べられている。この「比較・対照」はまた、「実感」と「観念」との「比較・対照」とも言い換えられようが、いずれにせよ、この一文全体は、「yハ、bダガ、xハ、aダ。」の文型ほぼそ

のままである。したがって、この表現などは、「比較・対照」のレトリックの典型的な事例と言える。

また、「*x*ハ、*b*デハナクテ、*a*ダ。」の文型の事例としては、同じく小林秀雄の「平家物語」の次の一文を挙げることができる。

作者（「平家物語」の作者——引用者註）を、本当に動かし導いたものは、彼のよく知つてゐた当時の思想といふ様なものではなく、彼自らはつきり知らなかつた叙事詩人の伝統的な魂であつた。
(㊤363～364 頁)

この事例などは、もはや何の説明も要しないほど、典型的な「比較・対照」のレトリックと言えようが、これら二つの例に限らず、小林の評論作品には、至る所にこのレトリックを見ることができる。実は、「比較・対照」のレトリックの多用こそは、彼の表現・文体の大きな特徴の一つなのである。以下にいくつかの例を引用しておく。

兼好の家集は、「徒然草」について何事も教へない。逆である。彼は批評家であつて、詩人ではない。「徒然草」が書かれたといふ事は、新しい形式の随筆文学が書かれたといふ様な事ではない。純粹で鋭敏な点で、空前の批評家の魂が出現した文学史上の大きな事件なのである。僕は絶後とさへ言ひたい。
(「徒然草」㊤379 頁)

評家は、彼（兼好——引用者註）の尚古趣味を云々するが、彼には趣味といふ様なものは全くない。古い美しい形をしつかり見て、それを書いただけだ。
(「徒然草」㊤380 頁)

これら（西行の歌——引用者註）は決して世に追ひつめられたり、世をはかなんだりした人の歌ではない。出家とか厭世とかいふ曖昧な概念に惑はされなければ、一切がはつきりしてゐるのである。自ら進んで世に反いた廿三歳の異常な青年武士の、世俗に対する嘲笑と内に湧き上る希望の飾り気のない鮮やかな表現だ。彼の眼は新しい未来に向つて開かれ、来るべきものに挑んでゐるのであつて、歌のすがたなぞにかまつてゐる余裕はないのである。
(「西行」㊤387 頁)

彼（西行——引用者註）の出家の直接の動機がどの様なものであつたにせよ、彼は出家によつて世間を狭めようとしたのではあるまい。無常観の雛形の様な生活が、彼の魂には狭過ぎたのである。
(「実朝」㊤424 頁)

彼（モオツァルト——引用者註）はあせつてもゐないし急いでもゐない。彼の足どりは正確で健康である。彼は手ぶらで、裸で、余計な重荷を引摺つてゐないだけだ。彼は悲しんではゐない。たゞ孤独なだけだ。孤独は、至極当たり前な、ありのまゝの命であり、でつち上げた孤独に伴ふ嘲笑や皮肉の影さへない。
(「モオツァルト」㊤74 頁)

これらの引用箇所は、小林が用いた「比較・対照」のレトリックのごく一部に過ぎない。しかし、これらの例からだけでも、小林が如何にこのレトリックを多用したかが分るのではない。そして、国語科教育の観点で重要なことは、国語のいわゆる定番教材として、多くの高等学校現代文の教科書に長らく採録されてきた「無常といふ事」¹⁰⁾にも、「比較・対照」のレトリックが多用されている、ということである。筆者は、拙稿(1998)において、文章レトリックの観点から作品「無常といふ事」の表現特性を分析するとともに、その表現特性と作品全体の読み(主題の読み取り)との関連を考察した¹¹⁾。結果として、この作品の主題の読み取りと切り離すことのできない四つの表現特性が析出された。次のとおりである。

- I 「比較・対照」のレトリックが多用されていること
- II 「繰り返し」のレトリックが多用されていること
- III 「比較・対照」・「繰り返し」という二種類のレトリックが重なり合っていること
- IV 「比較・対照」のレトリックが相互に関連し合っていること

ここで、「I 『比較・対照』のレトリックが多用されていること」の根拠にしたのは、この一作品の中に、少なくとも7つの「比較・対照」のレトリックが用いられている、ということである。今一度、「*x*は、*b*デハナクテ、*a*ダ。」の文型にまとめて列挙すると、次のようになる。

- ① 歴史(*x*)は、解釈する(できる)もの(*b*)ではなくて、解釈を拒絶して動じない美しいもの(*a*)である。
- ② 美(*x*)は、学問の対象(*b*)ではなくて、動かされ感じる(すなはち、感動する)もの(*a*)である。
- ※③ 晩年の鷗外(*x*)は、考証家に堕したの(*b*)ではなくて、歴史の魂に推参したの(*a*)である。
- ※④ 思ひ出がみんな美しく見えるの(*x*)は、僕等が過去を飾り勝ちだから(*b*)ではなくて、過去が僕等に余計な思ひをさせないから(*a*)である。
- ※⑤ 僕等が一種の動物的状態から救はれるため(*x*)には、過去を記憶するの(*b*)ではなくて、(心を虚しくして)過去を思ひ出すこと(が必要)(*a*)である。
- ※⑥ 無常(*x*)とは、仏説といふ様なもの(*b*)ではなくて、生きてゐる人間の置かれる一種の動物的状態のこと(*a*)である。

- ⑦ 常なるもの（*x*）は、現代人（*b*）は見失つたが、鎌倉時代の何処かのなま女房（*a*）は見据ゑてゐた。

「無常といふ事」の全文をここに引くことはしないが、「一言芳談抄」からの引用を含めて全68文、2400字に満たない文章に、少なくとも7つの「比較・対照」のレトリックが用いられており、拙稿(1998)の分析によれば、18もの文がこのレトリックに絡んでいるのである。作品「無常といふ事」に、「比較・対照」のレトリックが多用されていることは明らかであろう。なお、上記7つのうち、※を付した③④⑤⑥の4つは、隣接する2文ないし3文によってこのレトリックが顕在化しており、「*x*ハ、*b*デハナクテ、*a*ダ。」の文型にまとめることは比較的容易である。また、⑦は、「*x*ハ、*b*デハナクテ、*a*ダ。」の文型ではないが、「現代人」（*b*）を否定的に、「鎌倉時代の何処かのなま女房」（*a*）を肯定的に述べているので、やはり「比較・対照」のレトリックと考えられる。敢えて「常なるものを見据ゑてゐるの（*x*）は、現代人（*b*）ではなくて、鎌倉時代の何処かのなま女房（*a*）である。」とするまでもないであろう。

以上のように、「無常といふ事」は、「比較・対照」のレトリックを多用して書かれた作品と言えるのだが、ここで、より重要なことは、このレトリックを捉えることと「主題」（テーマ）を読み取ることが密接に関連している、ということである。つまり、「主題」（テーマ）を読み取るうえで、このレトリックに着目することがきわめて有効なのである。このことについて、拙稿(1998)では、先のⅠ～Ⅳの表現特性を踏まえつつ、次のように結論付けた。

つまりは、この作品の主題は、多用された「繰り返し」のレトリックと重なり合って用いられた多くの「比較・対照」のレトリックが、キーワードを介して互いに結び付き、収斂するところにある、ということである。読者は、多用され、また、重なり合ったこれら二種類のレトリックに注意を払い、特に、「比較・対照」のレトリック相互の結び付きを見通すことによって、主題を読み取ることができるのである。(29～30頁)

本稿では、「繰り返し」のレトリックについての説明を割愛しているので、この結論は少々分りにくいかも知れない。そこで、「比較・対照」のレトリックを捉えることが、この作品の「主題」（テーマ）の読み取りと如何に関連しているかを簡潔に説明すると、以下ようになる。もちろん、ここで言う「比較・対照」のレトリックとは、先の①～⑦の7つであり、これらを捉えることが前提である。

この作品の「主題」（テーマ）を考える際には、まず、「表題」（タイトル）の「無常といふ事」が「話題」型のそれである¹²⁾ことに着目して「無常といふ事」を文章全体の「話題」（*X*）に認定すると、その「無常」が「話題」（*x*）になっている「比較・対照」のレトリック⑥を、「主題文」（テーマ・センテンス）の基本、いわば骨組みにすることができる。ついで、⑥の「生きてゐる人間」が④・⑤の「僕等」や⑦の「現代人」と同義であり、また、⑦の「常なるもの」が①・③の「歴史」や④・⑤の「過去」を意味していることを捉えれば、「生きてゐる人間」（「僕等」・「現代人」）が「常なるもの」（「歴史」・「過去」）を「見失つて」（⑦）、「思ひ出すこと」（⑤）

ができないでいることが擱めよう。もちろん、「常なるもの」（「歴史」・「過去」）は、「解釈を拒絶して動じない美しいもの」(①)である。最後に、これらのことを踏まえて、「主題文」（テーマ・センテンス）の骨組みに認定した「比較・対照」のレトリック⑥を整備すれば、作品「無常といふ事」の「主題」（テーマ）は、次のようになるであろうか。

無常（X）とは、仏説といふ様なもの（B）ではなくて、常なるもの、すなはち、解釈を拒絶して動じない美しい歴史・過去を見失ひ、思ひ出せないで生きてゐる人間の置かれる一種の動物的状態のこと（A）である。

このように、小林秀雄の「無常といふ事」においては、「比較・対照」のレトリックという観点から「主題」（テーマ）を把握し、「主題文」（テーマ・センテンス）をまとめることが十分に可能であり、また、きわめて有効なのである。小林の評論作品では、先にその一節を引用した「平家物語」や「徒然草」、あるいは、「美を求める心」なども高等学校の国語教科書に採録されてきたが、これらを国語教材として扱う際には、「比較・対照」のレトリックという観点を導入することが、その読解指導に大いに役立つものと考えられる。ただし、小林秀雄の表現・文体については、「現代日本語の散文は、いずれも、小林のそれを原文体とする無数の変異形だと見えなくもない。」¹³⁾ という指摘や、「小林秀雄の表現特性をさぐることは、評論文一般の表現特性の原点をさぐることになる。」¹⁴⁾ という指摘がなされていることを忘れてはなるまい。つまり、これらの指摘を踏まえれば、「文体」や「表現特性」は様々な分析できるにしても、小林以後の評論文には、「比較・対照」のレトリックが用いられている可能性が高く、したがって、「比較・対照」のレトリックの観点を導入することの有効性は、小林以外の評論文教材を読解指導する際にも当てはまることが多いと予想されるのである。次章で検討・確認する。

3

ここでは、高等学校の国語教科書に収載されている、小林秀雄以外の評論文を取り上げ、その読解指導に「比較・対照」のレトリックの観点を導入することが如何に有効であるかを、具体的に検証する。ただし、言うまでもないことであるが、全ての評論文の読解指導にこの観点を導入できるわけではない。導入することのできる評論文は、当然、「比較・対照」のレトリックが用いられているものに限られる。そこで、まずは、このレトリックが用いられていることを容易に捉え得る、山崎正和の「水の東西」を取り上げる。この評論文も複数の国語教科書に収載されているが、以下の引用は、『新編 国語総合 三訂版』（大修館書店、2011年）収載のものに拠る（154～159頁）。ただし、文番号は、引用者が施したものである。

「水の東西」全文

⁰¹ 「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌のなかに、なんとなく人生のけだるさ

のようなものを感じることがある。⁰² かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに筧の水が少しずつたまる。⁰³ 静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。⁰⁴ 緊張が一気にとけて水受けが跳ね上がるとき、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもった優しい音をたてるのである。

⁰⁵ 見ていると、単純な、ゆるやかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。⁰⁶ 緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし何事も起こらない徒労がまた一から始められる。⁰⁷ ただ、曇った音響が時を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。⁰⁸ 水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。⁰⁹ それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れてやまないものの存在を強調していると言える。

¹⁰ 私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。¹¹ 日本の古い文化がいろいろと紹介されるなかで、あの素朴な竹の響きが西洋人の心をひきつけたのかもしれない。¹² だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い間隔を聞くゆとりはなさそうであった。¹³ それよりも窓の外に噴き上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

¹⁴ 流れる水と、噴き上げる水。

¹⁵ そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場にはいたるところにみごとな噴水があった。¹⁶ ちょっと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。¹⁷ 有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋め尽くしていた。¹⁸ 樹木も草花もここでは添えものにすぎず、壮大な水の造型がとどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。¹⁹ それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとぼしするというよりは、音をたてて空間に静止しているように見えた。

²⁰ 時間的な水と、空間的な水。

²¹ そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統のなかに噴水というものは少ない。²² せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水のみだけは近代に至るまで忘れていた。²³ 伝統は恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。²⁴ そのせいか東京でも大阪でも、町の広場はどことなく間が抜けて、表情に乏しいのである。

²⁵ 西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。²⁶ ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。²⁷ だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。²⁸ 日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかったのであろう。

²⁹ いうまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。³⁰ そうして、形がないということについて、おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みを持っていたのである。³¹ 「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられていた。³² それは外界に対する受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを

恐れない心の現れではなかつたろうか。

³³ 見えない水と、目に見える水。

³⁴ もし、流れを感じるだけで大切なのだとしたら、我々は水を実感するのに、もはや水を見る必要さえないと言える。³⁵ ただ断続する音の響きを聞いて、その間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい。³⁶ そう考えればあの「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。

全 36 文、1600 字足らずの短い評論文である。一読しただけで、容易に「比較・対照」のレトリックが用いられていることを掴めよう。それは、「水の東西」という表題（タイトル）からも察しが付くが、「日本人にとっての水」と「西洋人にとっての水」との「比較・対照」である。この二者が文章全体の「話題」（中心のものごと）としての「X」と「Y」であり、これらが第 14 文「流れる水と、噴き上げる水」、第 20 文「時間的な水と、空間的な水」、そして、第 33 文「見えない水と、目に見える水。」などと、繰り返し「比較・対照」されているのである。なるほど、「日本人にとっての水」や「西洋人にとっての水」という文言そのものは、本文中には見当たらない。けれども、この文章がひと言で言えば「何」について書かれたものであるかを考えて、つまり、文章全体の「話題」（中心のものごと）が「何」かということを念頭に置いて文章を読み、「日本人にとっての水は」で始まる第 28 文に着目すれば、これらの二つの文言を、「比較・対照」された二つの「話題」（中心のものごと）に認定できるのではないか。以下に順を追って説明する。

第 28 文は、「*x* ハ、*b* デハナクテ、*a* ダ。」という典型的な「比較・対照」のレトリックの文型からすれば、「*a*」と「*b*」との順序が逆になり、「*x* ハ、*a* デアリ、*b* デハナイ。」という文型になっているものの、「比較・対照」のレトリックであることに違いは無い。この明らかに「比較・対照」のレトリックが用いられた第 28 文に着目することが、この文章の「主題」（テーマ）を捉えるうえで、まず重要なことである。

日本人にとって水（*x*）は自然に流れる姿が美しいの（*a*）であり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象（*b*）ではなかつたのであろう。

次に重要なことは、「水」を「圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象」としたのは、「噴水」を発達させてきた「西洋人」である、ということを本文から読み取れるかどうかである。これが読み取れたならば、この第 28 文には、「西洋人にとって（の）水」という文言が隠れていることが分かり、この文言を補えば、次のような「*y* ハ、*b* ダガ、*x* ハ、*a* ダ。」の文型の「比較・対照」のレトリックとして、この一文を書き換えることができよう。

西洋人にとって（の）水（*y*）は、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象（*b*）だが、日本人にとって（の）水（*x*）は、自然に流れる姿が美しいの（*a*）である。

このように第 28 文を書き換えたならば、「日本人にとって (の) 水」と「西洋人にとって (の) 水」とが「比較・対照」されていることは、もはや明白である。こうして、「日本人にとって (の) 水」と「西洋人にとって (の) 水」とを、「比較・対照」された二つの「話題」(中心のものごと)、「X」と「Y」とに認定することになるのである。なお、「日本人にとって (の) 水」を「X」、「西洋人にとって (の) 水」を「Y」に認定する理由は、第 28 文に「西洋人にとって (の) 水」が隠れていることもそうだが、それ以上に、この文章が日本の「鹿おどし」についての叙述で始まり、最終の第 36 文がやはり「鹿おどし」についての叙述で締め括られていることを考えれば、「日本人にとって (の) 水」の方により重点が置かれているのは明らかだからである。それからもう一点付言すると、丸括弧で括った助詞の「の」は、その有無によって(語句の係り受け関係には違いが生じるものの) 文意に違いはほとんど生じないので、このように表記しておく。

さて、この文章全体の「主題」(テーマ) であるが、これを捉えるには、第 28 文を書き換えた上の一文を、ひとまず「主題文」(テーマ・センテンス) の基本・骨組みに据え、これに過不足無く「趣意」(とらえかた) を盛り込んで整備することになろう。すなわち、第 14 文・第 20 文・第 33 文や、あるいは、「鹿おどし」と「噴水」との具体例をも考慮して整備すれば、次のようにまとめられるであろうか。

西洋人にとって (の) 水 (Y) は、空間に噴き上げる水を目で見て楽しむ噴水が発達したことから分かるように、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象 (B) だが、日本人にとって (の) 水 (X) は、自然に流れる姿が美しいのであり、さらには、「鹿おどし」に象徴されるように、時間など流れてやまないものを感じさせるならば、たとえ見えなくともよいもの (A) である。

これが、評論「水の東西」の「主題文」(テーマ・センテンス) の一例である。もちろん、一文が長く複雑なので、「それに対して」などの接続語を用いて、二文に分けることも可能であろう。あるいは、また別のまとめ方もあるかも知れない。しかし、少なくとも言えることは、文章中に用いられている「比較・対照」のレトリックに着目して、「主題文」(テーマ・センテンス) をこのレトリックの典型的な文型にまとめることは、その文章の「主題」(テーマ) を把握する際の、きわめて有効な一つの方法である、ということである。引き続き、以下で、この方法の有効性を具体的に確認する。

二例目の評論文として取り上げるのは、中村雄二郎の『『おもしろい』と『分かる』』である。表題(タイトル) からだけでも「比較・対照」のレトリックが用いられているであろうことは想像できるが、全文は次のとおりである。この引用は、『新編現代文』(東京書籍、2008 年) に拠る(314～319 頁) が、文番号は、引用者が施したものである。

『『おもしろい』と『分かる』』 全文

⁰¹ 言葉の不思議さは、しばしば筆者の意図を超えてひとりで動きだし、新しいメッセー

ジを生み出すことである。⁰² 人によってはあたりまえのことかもしれないが、私のようにもともとの素養が理科系から出発した人間にとっては、このようなことに関して、言葉からも読書からも、新鮮な感銘を受けることが多かった。⁰³ そのような自分の経験から学び知ったことの幾つかをここで披露したいと思う。

⁰⁴ しだいに自分の中ではっきりしてきたことの一つとして、「分かる」ことを中心にして書物を読むか、それとも「おもしろい」ことを中心にして読むか、ということがある。

⁰⁵ 「分かる」こと、理解することを中心あるいは基準にして書物を読むことは、これまでの読書の主流をなす読み方であり、言葉で書かれた書物を読む以上、最初はだれでも、そこから出発しないわけにはいかない。⁰⁶ 相手の発するメッセージを、なにほどかにせよ受け取らないかぎり、何も始まらないからである。

⁰⁷ しかも、書き手の発するメッセージが「分かる」ということは、我々読み手の側に、何か新しい知識を与えるだけでない。⁰⁸ 我々読み手と書き手との内面的な交流が、そこに生じるのである。⁰⁹ コミュニケーションという言葉の深い意味もそこにある。¹⁰ 「自分と相手が一つの関係に入る」というのが、もともとの意味だからである。¹¹ そのことについての最も感動的な例が、初めて言葉を知ったあのヘレン・ケラーの場合である。

¹² 盲・聾・啞の三重の闇に閉ざされて七つになった少女ヘレン・ケラーは、先生のミス・サリバンの努力と本人の意欲によって、最初幾つかの身近な物の名を学んだ。¹³ サリバン先生はヘレンの小さな掌に、例えばw-a-t-e-rという文字を書いて、それがカップに入った水であり、顔を洗う時に洗面所で触れる水であることを教えていた。¹⁴ だが、それだけではまだ、水はその時々を感じるものにとどまり、泉や小川にもある同類へとつながっていかなかった。¹⁵ その「水」が言葉として動きだし、広い世界への通路を開くようになるには、冷たい水の流れに触れての内面の触発という、もう一つの段階を経なければならなかったけれど、その二つの段階自体が、自分と相手が一つの関係に入ることの深まりを示している。

¹⁶ 先に私は、「分かる」ことを中心にした読書は、従来の読書の主流をなす読み方であり、言葉で書かれた書物を読む以上、最初はだれでも、そこから出発しないわけにはいかない、と言った。¹⁷ それに、「分かる」ということは、ヘレン・ケラーの例からも明らかなように、知識を得るだけにとどまらない。¹⁸ 更に、知識の世界もたいへん奥深いから、学ぼうとすればきりが無い。¹⁹ だが、「分かる」ことを中心にして書物を読むことには、大きな落とし穴がある。

²⁰ というのは、「分かる」ことにこだわり、それを絶対視する場合には、逆に読み手は、何か「分からない」ことや「分かりにくい」ことに会おうと、門を閉ざされた思いがして、書物との関係を、ひいては、「自分と相手が一つの関係に入る」という本来のコミュニケーションを断つことになるからである。²¹ 今日メディアは多元化しているから、そのような恐れはない、と人は言うかもしれない。²² しかし、現実にはさまざまな新しい映像メディアの氾濫は、自閉的な人間を増やしはしても、減らしているとは言えないだろう。

²³ 「おもしろい」は「分かる」に比べて、特に読書の基準として、長い間おとしめられてきた。²⁴ なぜだろうか。²⁵ 思うに、「分かる」ことを中心とした読書には、くそまじめ主義が

つきまっていたからであろう。²⁶ 刻苦精励してまじめに勉強することのイメージが、かつては読書に強かった。²⁷ 事実、ある種の辛抱強さも読書には必要である。²⁸ しかし、その辛抱強さを支えるものは、ある本の内容を「おもしろい」と思うことによる関心の高さでなければならないはずである。

²⁹ そのうえ、私が「おもしろい」ことを中心にした読書を勧める理由は、本の選択に関して、少なくとも自分にとって「おもしろい」、あるいは関心を持てるという基準がもっと大事にされていい、と思っているからである。³⁰ 私自身、自分のことを顧みると、本の選択に際しては、できるだけ情報のアンテナは広く、いろいろなところに張り巡らしたうえでだが、自分にとって「おもしろい」、あるいは関心の持てるものばかり読んできた。³¹ 自分の好みに合うというか、自分の波長に合うものというか、ほとんどそういうものを読んできた。

³² こういう読み方をしていると、多少不都合なことや不安になることもないわけではない。³³ いわゆるベストセラーものはあまり読まず、そのために、時に世情に疎くなることもあるが、それよりも、古典的な良書と思われるものでも、なかなか自分の納得のいく仕方で読むきっかけがつかめないことがあるのである。³⁴ しかし、その反面で、分野や時代の違ういろいろな本からのメッセージが自分の中でおのずと結びついて、知的財産になるという利点がある。

³⁵ だから、このごろでは、そういう経験をふまえて、若い人たちに助言を求められると、自分が「おもしろい」と思わない本は無理に「分ろう」としなくてもいい、それより少しでも自分に関心がある問題を書物のうちに探し、また本の中から自分にとっての新しい問題を見つけることのほうがいいだろう、と言うことにしている。

³⁶ さて、表題の『『おもしろい』と『分かる』』は、もともとは「分かる」と「おもしろい」という二つの基準をただ並列的に並べたものだが、そのかぎりでは、二つの基準の順序を逆にして『『分かる』と『おもしろい』』としても、内容的には同じはずである。³⁷ ところが実際には、このように書くと、その含意は、格助詞の「と」が **and** の意味よりむしろ、**therefore** の意味を持つから、原因と結果の関係が逆転することになる。³⁸ したがって、『『分かる』と『おもしろい』』では、私の言わんとする趣旨とは反対になってしまう。³⁹ そして、言うまでもなく、こういうことも、言葉の不思議なはたらきの一つである。

⁴⁰ この場合、『『おもしろい』と『分かる』』という配列で私が言いたいのは、「おもしろい」と思い、強い関心を持てることが、絶えず問いを投げかけさせ、その結果、より深く、またより豊かに「分かる」ことになる、ということである。⁴¹ 逆に、よく『『分かる』と『おもしろい』』ということには必ずしもならない、と言いたいのである。

この評論文にも、表題（タイトル）から予想されたとおり、明らかな「比較・対照」のレトリックが用いられている。しかも、「比較・対照」されている二つの「話題」（中心のものごと）、「X」と「Y」を捉えることは、きわめて容易である。第二段落の第 04 文に、『『分かる』』ことを中心にして書物を読むと『『おもしろい』』ことを中心にして読む」という二つの「話題」（中心のものごと）が明示されるとともに、その後、多少言い換えられてはいるが、何度も繰

り返して述べられているからである。『『分かる』ことを中心にして書物を読む』は、『『分かる』こと、理解することを中心あるいは基準にして書物を読むこと』（第 05 文）、「書き手の発するメッセージが『分かる』ということ」（第 07 文）、『『分かる』ことを中心にした読書』（第 16 文）、『『分かる』ことを中心にして書物を読むこと』（第 19 文）、『『分かる』ことを中心とした読書』（第 25 文）などといった具合であり、一方、『『おもしろい』ことを中心にして読む』は、『『おもしろい』ことを中心にした読書』（第 29 文）、「少しでも自分に関心がある問題を書物のうちに探し、また本の中から自分にとっての新しい問題を見つけること」（第 35 文）などといった具合である。そして、どちらが「X」で、どちらが「Y」かを捉えることも容易である。第 19 文で、「大きな落とし穴がある」として、『『分かる』ことを中心にして書物を読むこと』がやや否定的・消極的に述べられているのに対して、第 29 文では、『『おもしろい』ことを中心にした読書』を「勧める」ことが明言されている。この二文に着目すれば、重点が置かれているのは明らかに『『おもしろい』ことを中心にして読む』の方であり、したがって、こちらが「X」、『『分かる』ことを中心にして書物を読む』が「Y」ということになる。

このように、「話題」（中心のものごと）の「X」と「Y」とが捉えられれば、引き続いて、これらに対する「趣意」（とらえかた）の「A」と「B」とを本文から読み取ることが、「主題」（テーマ）を把握するために必要である。以下に、本文から読み取ることのできる、「A」・「B」それぞれの要素と考えられるものを○の番号を付けて列挙する。なお、それぞれの末尾に、どの文から読み取れたかを括弧書きで付すが、表現は、よりまとまりよく改めたものもあり、本文どおりとは限らない。また、最終的に、「Yハ、Bダガ、Xハ、Aダ。」という文型の「主題文」（テーマ・センテンス）にまとめることを考慮して、「B」の方を先に挙げる。

Y：「分かる」ことを中心にした読書

- B：①従来の読書の主流をなす読み方であり、言葉で書かれた書物を読む以上、最初はだれでも、そこから出発しないわけにはいかない（第 05 文・第 16 文）
- ②読み手が何か新しい知識を得るだけでなく、読み手と書き手との内面的な交流、すなわち、「自分と相手が一つの関係に入る」という本来の意味でのコミュニケーションが生じる（第 07 文～第 10 文）
- ③何か「分からない」ことや「分かりにくい」ことに会おうと、門を閉ざされた思いがして、書物との関係を、ひいては、本来のコミュニケーションをも断つことになる、という大きな落とし穴がある（第 19 文・第 20 文）
- ④くそまじめ主義、すなわち、刻苦精励してまじめに勉強することのイメージがかつては強かった（第 25 文・第 26 文）

X：「おもしろい」ことを中心にした読書

- A：①自分（中村）が専ら経験し、（若い人たちに）勧めるべきもの（第 29 文・第 30 文・第 35 文）
- ②本の選択に関して、少なくとも自分にとって「おもしろい」かどうかを基準にして

いる（第 29 文）

- ③「おもしろい」という基準は、長い間おとしめられてきた（第 23 文）
- ④ある本の内容を「おもしろい」と思うことは、読書に必要なある種の辛抱強さを支えるものなので、「おもしろい」という基準は、もっと大事にされるべき（第 27 文～第 29 文）
- ⑤多少不都合なことや不安になることがあるけれども、分野や時代の違ういろいろな本からのメッセージが自分の中でおのずと結びついて、知的財産になるという利点がある（第 32 文・第 34 文）
- ⑥少しでも自分に関心がある問題を書物のうちに探し、また本の中から自分にとっての新しい問題を見つける読書のしかた（第 35 文）
- ⑦『『分かる』と『おもしろい』』ということには必ずしもならないが、『『おもしろい』と『分かる』』のである（第 40 文・第 41 文）

以上を、「Yハ、Bダガ、Xハ、Aダ。」の文型にまとめれば、この評論文の「主題文」（テーマ・センテンス）が得られるのだが、ただ、「B」の①～④、および、「A」の①～⑦を全て盛り込むと、分量的に多過ぎて、かえって分かりにくくなるのではないか。「大意」（アウトライン）や「要旨」（サマリー）であればともかく、「主題」（テーマ）を把握するのであれば、これらの「趣意」（とらえかた）をより重要なものだけに絞ることが必要であろう。もちろん、それぞれの表現をより簡潔に言い換えることも必要である。また、強いて一文にまとめることに拘らなくてもよいかも知れない。これらのことを考慮して整備すると、次のようになるであろうか。

「分かる」ことを中心にした読書（Y）は、だれもがそこから読書を始める、従来の主流をなす読み方（B①）であり、読み手が新しい知識を得るだけでなく、書き手との間に「自分と相手が一つの関係に入る」という本来の意味でのコミュニケーションが生じるもの（B②）だが、何か「分からない」ことや「分かりにくい」ことに出会った場合には、書物との関係や本来のコミュニケーションを断ってしまう危険性がある（B③）。それに対して、「おもしろい」ことを中心にした読書（X）は、その「おもしろい」という基準が長い間おとしめられてきた（A③）が、「おもしろい」と「分かる」ことになるの（A⑦）であるから、この基準をもっと大事にすべき（A④）であり、したがって、若い人たちに勧めるべき読書のしかた（A①）である。

これでもまだ分量的に多いのかも知れぬ。さらに簡潔にすることも可能であるが、しかし、そこまでしなくとも、このように「主題文」（テーマ・センテンス）をまとめられれば、この文章の「主題」（テーマ）を把握できたと言えるのではないだろうか。

以上、二つの事例文で具体的に示したように、小林秀雄以外の評論文でも、その読解指導に「比較・対照」のレトリックの観点を導入することは十分に可能であり、また、きわめて有効

と考えられるのである。

4

本稿では、国語科教育において、特に評論文教材の読解指導を行う際、「比較・対照」のレトリックという表現上の特徴に着目して「主題」（テーマ）を把握する方法を具体的に提示した。これにより、同時に、その有効性、すなわち、この方法を用いれば、「主題」（テーマ）を精確かつ比較的容易に捉え得る、ということをも実証的に示せたのではないか。たしかに、本稿において取り上げた評論文教材は、小林秀雄の「無常といふ事」、山崎正和の「水の東西」、そして、中村雄二郎の『『おもしろい』と『分かる』』の三作品にしか過ぎない。けれども、国語教科書に採録された評論文の多くにこのレトリックが用いられており、したがって、この読解方法は、多くの評論文教材に適用することが可能と考えられるのである。たとえば、高等学校現代文の定番教材として多くの教科書に収載されている、丸山真男の『『である』ことと『する』こと』なども、その「表題」（タイトル）どおり、このレトリックが用いられていることは明らかであり、本稿で示した方法を用いて「主題」（テーマ）を把握することが十分に可能かつ有効である。あるいは、同じく高等学校現代文の定番教材である、清岡卓行の「ミロのヴィーナス」¹⁵⁾もそうである。「失われた両腕」と「両腕の復元案」とが「比較・対照」されて論じられていることは明らかであり、やはりこの方法を適用することができるのである。このような具体例を挙げていけば切りが無いが、それほどに「比較・対照」のレトリックを用いて書かれた評論文（教材）は多く、その意味でも、この読解方法の有効性は高いと言えるのではないだろうか。指導者には、この方法を用いた読解指導が可能かどうか、つまり、その評論文に「比較・対照」のレトリックが用いられているかどうかを見抜く力が、まず求められるのである。

なお、一点補足すれば、本稿では、評論文の説得力を高める要因として、文章表現のレトリックのうち、特に「比較・対照」のレトリックに着目したが、これ以外にも、たとえば土部(1982)が「主題を論証するのに必要な題材が、必要な構成のしかたによって十分に展開されているとき、明確で客観的で説得力の強い文章表現がなりたつ。」(40～41 頁)と述べているように、文章の「構成」もまた、説得力の有無に与る重要な要素である。土部(1982)では、「文章構成法」に、次のような三類十種の基本的なパターンを認めている (41 頁)。

- (1)「ものごと」のありよう（事物論理的関係）に即した構成
 - ①時間的経過に即した構成
 - ②空間的配列に即した構成
- (2)「ものの見かた・考えかた」のありよう（思考論理的関係）に即した構成
 - ③同類・異類の関係に即した構成
 - ④主要・副次の関係に即した構成
 - ⑤全体・部分の関係に即した構成

- ⑥理由・帰結の関係に即した構成
- ⑦一般・特殊の関係に即した構成
- ⑧肯定・否定の関係に即した構成
- (3)「ものごとのかた」のありよう（実践論理的関係）に即した構成
- ⑨課題・解明の関係に即した構成
- ⑩成果・方法の関係に即した構成

これらのうち、「比較・対照」のレトリックが用いられた評論文の文章構成は、「類似性をもっているものごとを並列し、差異性をもっているものごとを比較・対照する構成」¹⁶⁾の「③同類・異類の関係に即した構成」か、あるいは、「一つのものごとに対して、二つ以上の見解がたてられ」、「そのうちの一つが肯定ないし承諾され、他が否定ないし拒絶される」¹⁷⁾構成の「⑧肯定・否定の関係に即した構成」になっていることが多いのではないかと考えられる。本稿で取り上げた評論文教材の例で言えば、「主題文」（テーマ・センテンス）を「Xハ、Bデハナクテ、Aダ。」の文型に収束できた「無常といふ事」は、「⑧肯定・否定の関係に即した構成」に、そして、「Yハ、Bダガ、Xハ、Aダ。」の文型に収束できた「水の東西」や『おもしろい』と『分かる』は、「③同類・異類の関係に即した構成」になっていると考えられる。ただし、『おもしろい』と『分かる』では、「Yハ、Bダ」に否定的・消極的な意味合いが、「Xハ、Aダ」に肯定的・積極的な意味合いが込められていることを考慮すれば、この評論文は、「⑧肯定・否定の関係に即した構成」になっているとも考えられる。いずれにしても、どちらも評論文の説得力を高める要因であるところの（「比較・対照」のレトリックをはじめとする）文章表現のレトリックと文章構成法との関連性を明らかにすることは、読解教育（ひいては作文教育）の理論と方法を考える際の、きわめて重要な課題である。いずれ機会を改めて検討・精査したい。

2000年に本調査が始まった「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」においても、「読解力」が調査の中心分野の一つであることは、周知のとおりである。つまり、学習者の読解力を向上させることは、国際的に見ても、重要な課題として位置付けられているのである¹⁸⁾。確かな理論にもとづいた、より実効性のある読解方法の開発が、いっそう求められる所以である。

註

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』（教育出版、2010年）9頁。
- 2) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』9～10頁。
- 3) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』10頁。
- 4) 物語文や小説文などのいわゆる文学的文章の場合には、必ずしも一義的に「主題」（テーマ）を把握することが求められるわけではない。むしろ、様々な読み方ができ、多様な「主題」（テーマ）を析出できる文章の方が、文学作品としての価値は高いとさえ言える。また、「主題」（テーマ）という術語そのものも、たとえば、「作者主題」と「読者主題」とに細分できたり、あるいは、「表象（的）主題」と「概念（的）主題」とに細分できたりするというように、多くの規定のしかたがあるので、どのレベルの「主題」（テーマ）であるかを考慮せずにこれを把握することは、なおさら困難である。

- 5) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』59 頁。
- 6) 土部(1993)5 頁。
- 7) 同前。
- 8) 土部(1993)8 頁。
- 9) 本稿では、小林の作品からの引用は、註のあるものを除いて、第 5 次の『小林秀雄全集』(新潮社、2001～2002 年、補巻Ⅰ～Ⅲの 3 冊は 2010 年発行)に拠った。ただし、引用の際、漢字は、原則として現行のものに改めた。以下、この全集の巻数を○の漢数字で示す。この引用箇所は、㊤353 頁。
- 10) 「無常といふ事」という「表題」(タイトル)は、たとえば、『現代文』(右文書院、2006 年)のように、原典どおりにこの表記を用いているものもあるが、多くの教科書では、「無常ということ」となっている。
- 11) 拙稿(1998)では、「無常といふ事」本文は、『現代日本文学大系 60 小林秀雄集』(筑摩書房、1969 年)収載のもの(253～254 頁)に拠った。本稿でも、以下、この(本文の)表記を踏まえている。
- 12) 土部(1993)は、「論理的文章の『表題』(タイトル)は、芸術的文章のばあいほどではないにしても、読者の興味・関心を引く工夫が凝らされていて、多種多様である。しかし、原文章の『要約(文)』としての『表題(文)』は、『話題』型・『主題』型・『課題』型などが代表者であろう。」(12 頁)と述べている。「無常といふ事」は、明らかに「話題」型の「表題」(タイトル)である。
- 13) 佐藤(1979)59 頁。
- 14) 小田(1990)184 頁。
- 15) 拙稿(2012)227 頁で指摘したように、「ミロのヴィーナス」という「表題」(タイトル)は、教科書によっては、「手の変幻」や「失われた両腕」となっているが、本文は、細かな相違を除いて、基本的に同一である。
- 16) 土部(1982)41 頁。
- 17) 土部(1982)42 頁。
- 18) ただし、PISA の「読解力」と日本の国語教育における「読解力」とは、質的に異なるのではないか、という議論も存在する。『日本語学』第 24 巻第 7 号 6 月号(通巻第 294 号、明治書院、2005 年)の特集「『読解力低下』は本当か？」参照。

参考・参考文献

- 小田迪夫(1990) 「第四章 文芸的評論の表現特性 —小林秀雄『平家物語』の場合—」『論説・評論の表現(表現学大系 各論篇第 27 巻)』教育出版センター
- 坂田達紀(1995) 「文章表現のレトリック —評論文の場合—」『国語表現研究』第 8 号、国語表現研究会
- 坂田達紀(1998) 「小林秀雄『無常といふ事』の表現特性 —文章レトリックの観点から—」『国語表現研究』第 11 号、国語表現研究会
- 坂田達紀(2012) 「国語教材としての評論文について —より良い読解指導のために—」『四天王寺大学紀要』人文社会学部第 54 号
- 佐藤信夫(1979) 「《ただ…ただ》ということ」『現代思想』第 7 巻第 3 号、青土社
- 土部 弘(1982) 「課題論文の説得原理」『国文学 解釈と教材の研究』第 27 巻第 2 号臨時号(通巻第 385 号)、学燈社
- 土部 弘(1993) 「論説・評論の主題と要旨」『国語表現研究』第 6 号、国語表現研究会